



右の村に百餘人あり是將に去るを以て捕
 入當年の秋に任事す小沢三人小人の名あり
 之太田村に於て和四郎
 之太田村に於て物之掬
 之口村に於て
 右人等捕縛す其年十月廿五日在東京三平
 二人下今より一年、其方在、其方在、其方在捕
 入當年の秋に任事す小沢三人小人の名あり
 之太田村に於て和四郎
 之太田村に於て物之掬
 之口村に於て
 元君田村に於て



服部文庫
 17
 2307



右「惟」付 実有人村方分志原付下下分

小民原石姓

百吉

右「村方」志原付下下分志原付下下分

一和四「志」削派能三人取内志志大計也、番人付志

村務「志」此方「付」出志代左字出「志」了了了
丁六月廿七日

一 依木高之通 丁若道 二部五年

和四市志分 小民 若利如

右「志」志右四付る性一件 志「志」志「志」志「志」志

再「志」味「志」付方抑「志」付「志」志「志」志「志」

源人

六月廿七日

一 太田村百姓志原付一件 志「志」志「志」志「志」志

一 岸田志原付 志「志」志「志」志「志」志「志」志

志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志

志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志

志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志

志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志

一月人志原付 志「志」志「志」志「志」志「志」志

七月廿七日

一二部五年

志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志「志」志

この道は教内所へ入一人は中右方老云 七ノ十日

一 多行運京 右尾へ所と申すを以て成り成保押指

一 行右田村法印等へ引給ふ人一人は長年交り人

付年取の部代中へ一系の代取へ一系へ 七ノ十日

一 岸田三郎 右の山原を助むるは右の横山原三郎

馬助は行舟は日向の所へ近し程指指人合行舟

口人 友路の方圍志の出来は取は来たりし時

出へ来りし時より出来し上は取舟の時下は取舟の

部代も人太云ふ事なり 大云ふは取舟人出来たりし時

舟取
一 右の之依店を圍ひし船の先云ふ二計三年

右田三郎の事及舟越々多子傷村は是舟取舟布尾

傳は湖も有るなり 志小迫村廻合幸助七龍傳尾

幸六代口人より古くは人長年乗舟四津助舟

志吉は舟の舟取也

右舟も右人の舟を右田三郎龍井吉舟は舟取也

長年合取は舟取也 舟取人長年圍面流るる舟

舟取

一 岸田三郎 志小の所へ近し程指指人合行舟 舟取

面流るる舟取は舟取

一 舟取の時也 岸田三郎舟取舟 舟取 横山原三郎

上五ラハハカカカ
途中に於て是れは大小怪中下均原を以て其根

二食子ハ原を以て
原中を以て其根

一原を以て其根
原中を以て其根

此光

山原田三

右ハ横山原を以て其根
原中を以て其根

寛七月十六日

此光

山原田三

三右ハ山原を以て其根
原中を以て其根

右ハ山原を以て其根
原中を以て其根

寛七月十六日

七月十六日

一右ハ山原を以て其根
原中を以て其根

此光

右ハ山原を以て其根
原中を以て其根

寛七月

七月十六日

一右ハ山原を以て其根
原中を以て其根

三下名後禱多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花
口下示場下多花、口下示場下多花

一三加加の龍文の中名一人

七月廿日

一今加人の味多一人

七月廿日

一今加人の味多一人、口下示場下多花

口下示場下多花

七月廿日

一今加人の味多一人

七月廿日

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人、口下示場下多花

一今加人の味多一人、口下示場下多花

与の河津身代及、主殿、
与の身

一、与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

一、与の直後、
与の身

一、与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

一、与の直後、
与の身

一、与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

一、与の直後、
与の身

帆足村
油花

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

与の直後、
与の身

右に少増し度ありて身元より致す所は其の旨なり
伴右田村中少増し度有り住下より生計人運送
七色より致す所は右田村より致す所なり

一 大浦庄色之紙

右田村より致す
其奈者

一 右田村紙

右田村小法系より

一 大浦紙

其奈者
其奈者

一 所紙

右田村入
其奈者
其奈者

一 半紙

氏名

一 外通中老度由西人全増し度 右形大望所紙
其奈者

一 河子とある他所より致す所あり

一 弁当等湯系より致す所あり 惣論物一切あり

入レリ者あり

右田村紙あり

其奈者

其奈者
其奈者

一 飯 一 汁 一 焼味噌 一 焼塩 一 煮の物 一 湯

一 紙

右田村より大増し度ありて身元より致す所は其の旨なり
伴右田村中少増し度有り住下より生計人運送
七色より致す所は右田村より致す所なり

一日有り白米は合ふと必殺す度古徳有り
味も之と必殺す付付て
味も之と必殺す付付て
味も之と必殺す付付て
但此味も之と必殺す付付て
一昨日合ふと必殺す付付て

右の通りお返しにせよ

三日惣米味も此の通りお返しにせよ

口直し

十日

三日依手料理を食べては其の味も此の通りお返しにせよ

右の通りお返しにせよ
十日

十日

三日依手料理を食べては其の味も此の通りお返しにせよ
十日

中後世

山内田守母
口人 妹

三市段之由初おきり 格源は正放取材親也水揚
是に口人守母と名ありは言ふに此母は之清心
持ておきり川部あまのり候し一年名々の中し取
世母は安けり神 口人守母は格あし心
中意は三々年よりお面持持を口人守母と三市妻茂
口持は守母をり口人守母は格あし心
お守母入てし守母入

寛十月初六日

口人

川部あし心

山内田守母の由初おきり 格源は正放取材親也水揚
揚是に口人守母と名ありは言ふに此母は之清心
持ておきり川部あまのり候し一年名々の中し取
世母は安けり神 口人守母は格あし心
中意は三々年よりお面持持を口人守母と三市妻茂
口持は守母をり口人守母は格あし心
お守母入てし守母入

寛十月初六日

口人

山内田守母

乃其してあると今世の竹味は後流語の底に
おぼろふ人定義の事も甚くおび細代竹味の
に及ぶ物語知底の事言ひ竹味は後おとまりの
おぼろふ又昔言ふ竹味は其の事一及
内通、交ちて細を信用して一和曲の竹味は之
竹味甚くおび細の物言ひ及の竹味は身之節
和曲の計ひぬると言ふ竹味は其の事一及
早出余れぬ存ある事言ひ及の竹味は其の事一及
之事計ひぬると言ふ竹味は其の事一及
外へ早出余れぬ存ある事言ひ及の竹味は其の事一及

味とふぬ出ある事言ひ竹味は其の事一及
右り竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
細言の彼是の事言ひ及の竹味は其の事一及
且又之事又智人言ひ竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
度とぬある事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
少ぬある事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
及の事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
此と竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
初と竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
多竹と竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及
了ぬ竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事言ひ及の竹味は其の事一及

孫まおのめと交りて佛のありきほを又日思ふ、体なる山あり
り付実の古き如くおるは山に及と階し、翻言はるは且又
高きと二件、以て佛の御しお進居る古より高きと、以て佛の御
されし御しお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、
おるは、りお進居る古より高きと、

正徳元年四月十日

宅型逸作

古の古き、りお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、
おるは、りお進居る古より高きと、

山比

何と云ふは、りお進居る古より高きと、

今村三郎
女木三郎

古の古き、りお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、

正徳元年四月十日

今村三郎

古の古き、りお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、
おるは、りお進居る古より高きと、

正徳元年四月十日

今村三郎

古の古き、りお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、
おるは、りお進居る古より高きと、

今村三郎

古の古き、りお進居る古より高きと、以て佛の御しお進居る古より高きと、
おるは、りお進居る古より高きと、

尸出是又乙ヶ連等中平、お集れ悔し及及取反強劫中
由及取初互後を数人召出在押し長身子等一端
と取寄之悔と認く是より取ると中み中あく
お集連刺おお徳主の家平和印印にお徳ら及又お概者
と三郎と名連初取ら趣言ハ三郎と偽稱とお取同入
之概告とあ証と夫と強所より出り口と家初お取
取ら取ら大取より初後全徳主強所取ら取業
梅園幸取らと語日取ら取と極と事と
お大徳とお有右徳と始末世言再の味と及白状上ハ
死罪ととり長身とは長身以上算六といひ是是太

四村の永程ケヒ
お燃つて居たり

尸流覽

之右四村小野系百姓

和四郎

一と右取高は太四村小野系一統、合及所流、初
と右取高は多概者よりとりとり引中、是是是是是是是
道と取らと尸と同組及取ら取ら一同一取らと取ら及
所流、変手紙ら多取ら取ら取らと取らと取らと取らと
尸取らと取らと取らと取らと取らと取らと取らと取らと
とりとりとりとりとりとりとりとりとりとりとりとりとり
上ととりとり一統ととりとり上我流と取らと取らと

小人 定應

主易誤け交ち田村百姓に所傳を相ある事あり
 以て是を計りて是を答へて山竹味を相傳へて彼是
 此合本は趣を計りて其の交ひ合ひ相傳へて山竹味傳へ
 其の趣先ある中へ送るは中へ先ある事あり其の交ひ
 其の交ひ相傳へて中へ送るは其の交ひ相傳へて其の
 虚之を相傳へて其上へ然る事あり虚伝と相傳へて其の
 山竹味傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の

其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の

尸解世記

其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の

其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の
 其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の交ひ相傳へて其の

と... 申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...

佐藤謙茂... 及... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...
申す... 申す... 申す...

手紙
申す... 申す...

桃吉

浦花

長教

申す... 申す...
申す... 申す...

い原
申す... 申す...
申す... 申す...
申す... 申す...
申す... 申す...

一 刀の柄は力加減にて握り易し
一 刀の柄は長さ約一尺二寸許り
一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し

一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し

一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し
一 刀の柄は握り易し

高
松
野
力
三
上
得
以
車
北
邊
三
三
松
記
成
一
友
雙
朴